様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６６７６

研究課題名（和文）20世紀前半における日本人舞踊家の国際的公演活動と欧米諸国での受容

研究課題名（英文）Japanese Performers' International Activities and Receptiveness in the West in the First Half of the Twentieth Century

研究代表者
柳下　惠美（Yagishita, Emi）

早稲田大学・文学学術院・助教

研究者番号：１０７５７２５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀前半に活躍したモダンダンスの創始者イザドラ・ダンカンと関わりのあった3人の日本人舞踊家（川上貞奴、花子（太田ひさ）、伊藤道郎）の欧米諸国での公演活動と文化交流、彼らの公演に対する評価と当時の日本のイメージについて、主に当時の新聞記事、公演プログラム、映像資料、雑誌、写真を基に調査、検証した。最後にイザドラ・ダンカンと上記3人の舞踊家の影響関係についても明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I focused on three Japanese dancers, Sada Yacco Kawakami, Hanako (Hisa Ota) and Michio Ito who had all performed in the US and Europe and had also known Isadora Duncan, the pioneer of modern dance and very well known dancer in the early twentieth century. I used historical newspapers, films, magazines and photographs to verify these three Japanese dancers' performances in the West and how their performances were reviewed and evaluated. In doing so, I also focused on the aspect of cultural exchange and the image of Japan in the West. With this approach and methodology, I was also able to reveal the confluent relation between Isadora Duncan and the three Japanese dancers.

研究分野：人文学

キーワード：川上貞奴　花子　伊藤道郎　イザドラ・ダンカン　ジャポニスム　日本人舞踊家　芸術文化　文化交流

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで、20 世紀前半、欧米を中心に活躍したモダンダンスの創始者イザドラ・ダンカンの活動の全容を解明するため現地調査を行い、彼女が創出した舞踊の形成と確立、施した舞踊教育、育成した愛弟子達の活動他について調査研究し、これまで不明瞭・未詳であった事柄を解明し、先行研究のいくつかの誤りを正すことができた。

しかし調査研究を進める過程で、自身の舞踊を探究していたイザドラが、ある時、「日本人の舞踊に一番魅了されている」と語っていることを知った。

20 世紀初頭は欧米において、ジャポニスムの潮流の最中にあり、ヨーロッパでは日本文化が高い評価を得ており、その頃渡欧し現地で公演活動を実施している日本人舞踊家には川上貞奴と伊藤道郎、花子(本名:太田ひさ)が存在した。3 人はイザドラ・ダンカンと直接、間接的に関わりをもち、当時各人は諸外国で絶賛を受けていたことがわかってきた。それにもかかわらず 3 人の日本人舞踊家に関する先行研究は、殆どが伝記的観点からの記述のみであり、当時の現地の新聞記事や他の一次史料を十分に調査分析し検証した痕跡がみられなかった。

２．研究の目的

本研究は、これまで申請者の研究対象であったイザドラ・ダンカンと関わりがあった 3 人の日本人舞踊家（イザドラの舞踊形成に影響を与えた川上貞奴、イザドラと交流をもった伊藤道郎、イザドラと面識があったとされる花子）の公演活動と文化交流、さらに彼らの舞踊の評価と当時の日本のイメージ等について、主に当時の現地新聞、公演プログラム、映像資料、雑誌、関係者へのインタヴューを基に詳細に調査・検証し、学術的観点からの解明を試みることを目的とする。

具体的には以下の 4 点について明らかにする。

（1）欧米諸国における川上貞奴の公演活動の評価と「ジャポニスム」の普及

（2）欧米諸国における伊藤道郎の公演活動の評価と文化交流の実態

（3）欧米諸国における花子の公演活動の評価とオーギュスト・ロダンとの交流

（4）川上貞奴、伊藤道郎、花子の 3 人が提唱した当時の「日本」のイメージおよびその相違点・類似点

３．研究の方法

従来の研究者の研究方法は、各々の芸術家、舞踊家のみを研究対象に限定しているのに対し、本研究は、20 世紀前半、国際的に活躍した 3 人の日本人舞踊家の世界各地に点在している公演活動に関する一次史料、文献資料、未発表の映像資料等を詳細に調査・分析し、それらを比較・検討・統合する作業を通じて、20 世紀前半の舞踊、芸術、文化について学際的観点からの理解を一層深めることとした。

国内においては当時の新聞・雑誌記事、関連史料の詳細な調査、また国外（アメリカ、イギリス、ポーランド、フランス、デンマーク）の諸機関や末裔宅（伊藤道郎）を訪れ、川上貞奴、伊藤道郎、花子に関連する現地の新聞ほか一次史料の調査収集に努めた。これらの収集した史料を基に、研究目的（1）、（2）、（3）に示した各々の舞踊家が公演活動を通して諸外国に与えた「日本」イメージの受容とその展開について検証し分析を行った。

また、研究目的（4）に示した 3 人が提唱した「日本的舞踊」の相違点・類似点、アメリカとヨーロッパでの彼らの公演に対する評価の違い、さらに欧米諸国が抱いた「日本」に対するイメージの相違点・類似点を明らかにし、欧米諸国が日本に抱いた印象が歴史的にどのようなものであったのかについて検証し考察を行った。

４．研究成果

＜平成 27 年度の研究成果＞

国内では主に当時の新聞記事等の閲覧・収集、国外のポーランドでは Akademia Teatralna、Biblioteka Narodowa、ワルシャワ大学図書館、Biblioteka Jagiellonska、Szkola Teatralna Biblioteka、イギリスでは大英図書館、ヴィクトリア＆アルバート博物館、フランスでは国立図書館、ロダン美術館、アメリカではニューヨーク公共図書館、カリフォルニア大学図書館、フィルハーモニック・アーカイヴなどの多くの研究機関で川上貞奴、伊藤道郎、花子に関する一次史料の収集を行い、それを基に公演活動について調査・分析した。

(１)10 月初旬に開催された日本の美学会(全国大会)において、イザドラ・ダンカンの独自な舞踊の形成に必要不可欠であった芸術家との交流について発表し、その中でダンカン舞踊の特徴である自由な踊りに影響を与えたと思われる川上貞奴の存在の重要性について次のように触れた。

イザドラ・ダンカンといえば、裸足で踊る踊り手として知られているが、彼女がアメリカ、イギリスで撮影された写真を検証したところ、裸足の踊りは見当たらなかった。しかし、パリに移住してからの踊りの写真は裸足になっており、その原点には 1900 年のパリ万博において、イザドラが連日のように通っていたロイ・フラー劇場の公演、川上貞奴の「履物を脱いで自由に舞台上で踊る」という行為の影響があるのではないかと考察した。イギリス時代にはそれまで履いていたタイツとバレエシューズを脱ぎ、素足にサンダルという姿で踊っており、まだ裸足というスタ

イルにはなっていなかった。以上のことからイザドラがサンダルを脱ぎ裸足で踊るに至った過程には、川上貞奴の影響が大きいと言及した。（※この点については既に博士論文で記述している）

(２)3 人に関する映像資料として、川上貞奴に関しては晩年彼女が岐阜県に建立した「貞照寺」の入仏式の様子が撮影されたものがあった。花子に関しては、題目不明の作品が見つかったが、花子の回想録に第一次世界大戦が始まる前に 1000 フランで撮影されたと記載されていたことから、この映像がそれに該当するものではないかと推測できた。伊藤道郎に関しては、映画作品「ブールー」の中で踊りを披露しているシーンがあることが判明した。

(３)10 月末にはポーランド（クラクフ）で開催された Polish Institute of World Art Studies 主催の国際会議 East Asian Theatres: Tradition－Inspiration-European/Polish Context において、“Sada Yacco and Hanako's Performances: Images of Exotic Japan in the West in the Early Twentieth Century”と題する研究発表を行った。発表の中で、川上貞奴と花子が欧米の観客に披露した舞踊、とりわけ演技の「ハラキリ」における当時の日本の野蛮なイメージの植え付けは、演技者のアイデアではなく興行主ロイ・フラーの要請によるところが大きいことを指摘した。川上貞奴も花子も劇中に「ハラキリ」のシーンを入れることについて疑問を抱きながら演じていたことにも言及した。

(４)10 月末、ワルシャワ大学で“Three Japanese Performers in the Early Twentieth Century: Sada Yacco, Hanako and Michio Ito”のタイトルで、貞奴、花子、伊藤道郎の舞踊の特徴について講演した。川上貞奴と花子に関しては出自の類似性と舞台で披露した演目について、伊藤道郎に関してはイギリスやアメリカで能からインスピレーションを得て創作した「鷹の井戸」のほかに、「田村」「二つの扇子」なども創作していたこと、1930 年代には踊り手全員が着物を身に纏って踊る「越天楽」など日本をアピールした作品をハリウッドボウルで友人近衛秀麿（近衛文麿の弟で指揮者）とコラボレーションを行い披露していたことについて言及した。

＜平成 28 年度の研究成果＞

主に国外の図書館、資料館に出向き、一次史料を閲覧収集し調査研究した。
フランスでは国立図書館、デンマークでは王立図書館、アメリカではロサンゼルス公共図書館、Toyo Photo Studio、 ホイットニー美術館、メトロポリタン美術館、イサム・ノグチ美術館、National Museum of Dance 等に所蔵されている一次史料、新聞記事、雑誌記事などを閲覧収集し、20 世紀初頭における 3 人の日本人舞踊家が当時の欧米諸国で如何なる評価を得ていたのか、また如何なる文化交流があったのか、3 人の相違点、類似点も含め検証し比較分析した。

(１)川上貞奴と花子の出自から幼少期・青年期に関して比較分析した結果、双方とも幼少期に養女に出され、舞妓、芸妓の訓練を受ける過程で日本舞踊を習得するなど非常に似通った体験をしていることが分かった。しかし川上貞奴はアメリカでの巡演の際、川上一座の一員としてやむなく女優として 20 代で舞台に立ったのに対し、日本で芸妓として生活していた花子は、ある興行師の誘いを受け、30 代前半の頃、自らの意志でコペンハーゲンに出向いており、舞台に立ったきっかけには違いがあることが分かった。国内外においての知名度は川上貞奴の方が高いが、史料調査から、海外での滞在期間や公演数などは花子の方が断然多いことも判明した。

(２)パリではサダヤッコと名付けられた呉服店が開店したり香水がパリ中心部で売られるなど、貞奴の人気は想像以上であったこと、また当時のフランス首相のための私的公演会で踊りを披露していたことが新聞記事から判明した。このような人気はそれ以前からパリで巻き起こっていたジャポニスムをさらに加速させるものであり、当時欧米において貞奴はジャポニスムを代表する偶像のような存在になっていることが推測できた。

(３)花子がその名を知られるようになったのはロダンが彼女をモデルにした数多くの彫刻作品を創作したことが主な要因と考えられるが、ロダン美術館所蔵の史料から、ロダンは彫刻作品だけでなく、着彩した花子のデッサンも描いていたことが判明した。
デンマーク王立図書館所蔵の史料を詳細に調べたところ、コペンハーゲンでの公演ではポスターの色が赤になっていたことから、理由は不明であるが、実際、公演の 1 回はキャンセルになっていたことや演目を変更して公演を行っていたこともわかった。

(４)伊藤道郎が 30 年代にハリウッドボウルで披露した伝統的な日本を基調とした作品「越天楽」は、これまでは観客に絶賛されていたとされていたが、当時の新聞記事を入念に調べたところ、壮大さは評価されたものの日本古来の楽器を使用した雅楽が当時のアメリカ人にはまだ音が馴染めず、むしろ洋楽を基調とした一方の演目、「美しく青きドナウ」の方が当時の観客には受け入れやすく高評を得て、再演されていたことがわかった。また当時、写真家東洋宮武氏が撮影したロサンゼルス時代の伊藤道郎の数多くの未刊行

の写真が Toyo Photo Studio に保管されていることが分かった。

(5)各人を教育の観点から調査した結果、貞奴、花子は現地に学校を創設するに至らなかったが、伊藤道郎はアメリカのニューヨークとロサンゼルスに舞踊学校を創設し、自身の考える新しい舞踊を教育していた。
　貞奴は帰国後、帝国女優養成所を創設し、道郎は帰国後も舞踊学校の他、俳優やモデルの養成にも力を注ぎ、終戦当時の日本に明るい未来を築こうとした。花子は国外、国内のどちらにも舞踊学校を開くことはなく、ロンドンに日本料理屋を開いていた。帰国後は舞踊家として公演を行うこともなく舞踊学校も創設しなかった。

(6)本研究で取り上げた 3 人の舞踊家各々がその公演活動において提唱した相違点としては、貞奴と花子の 2 人は「ハラキリ」のシーンをメインに日本を主張し評価を得ようとしたが、伊藤道郎は、W・B・イェイツや友人山田耕筰や近衛秀麿とコラボレーションを行い、日本を基調とした作品を積極的に披露し日本をアピールした。

(7)日本人舞踊家 3 人の共通点としては、海外に出向く前に日本舞踊を学んでいたこと、海外では作品の中で日本舞踊を一部取り入れて日本を提唱していたことが挙げられる。それは 20 世紀初頭の西欧化された日本ではなく、むしろまだ封建制時代の日本の表現であったことが共通項として考えられる。

(8)イザドラ・ダンカン以外の芸術家（画家、彫刻家、写真家）との関わりについて、画家パブロ・ピカソやオットー・ミュラーが川上貞奴を描き、彫刻家オーギュスト・ロダンが 60 以上もの花子のマスクを作成、伊藤道郎に関しては、彫刻家イサム・ノグチがマスクを創作、写真家東洋宮武が数多くの伊藤の写真を撮影していた。このように、本研究対象 3 人の日本人舞踊家各々が常に同時代の他分野の著名な芸術家の創作意欲を鼓舞する存在であったことが分かった。

(9)これまで明らかにされてこなかったイザドラ・ダンカンと 3 人の日本人舞踊家の接点、影響関係および欧米諸国での受容について国際学会(The Congress on Research in Dance と Society of Dance History Scholars の Joint Conference)で“Isadora Duncan and the Japanese Performers: Sada Yacco, Hanako and Michio Ito”と題し次のように発表した。
　パリ万博のロイ・フラー座に連日通って観ていた川上貞奴の踊りからは日本舞踊独特の流れるような動きと草履を脱いで踊る姿に触発され、イザドラもサンダルを脱いで裸足で踊るようになったであろうこと、花子とはモスクワで出会っていたことが花子の回想録から判明し、イザドラがロシアで花子の迫真に迫るリアルな演技を鑑賞し、そこから舞台上でのリアリティーをさらに追及するようになったのではないかと推測できた。
　伊藤道郎は、第一次世界大戦中にニューヨークで行われたイザドラの公演の招待者であったこと、それ以降互いに自らのダンススタジオを行き来するなど、非常に親交を深めており、それぞれの芸術観について意見交換していた可能性が高いことが推測できた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 9 件）

① Emi Yagishita. “Isadora Duncan and Japanese Performers: Sada Yacco, Hanako and Michio Ito.” Congress on Research in Dance Conference Proceeding（アクセプト済み）2017 年刊行予定（査読有）

② Emi Yagishita. “Sada Yakko’s and Hanako’s Performances: Images of Exotic Japan in the West in the Early Twentieth Century.” Polish Institute of World Art studies & Tako Publishing House（アクセプト済み） 2017 年刊行予定（査読有）

③柳下惠美、「ロシアにおけるイザドラ・ダンカンの舞踊学校」『多元文化』第 6 巻、2017、89-111（査読有）

④柳下惠美、「伊藤道郎のアメリカにおける舞踊活動―ロサンゼルスでの活動を中心に―」『WASEDA RILAS JOURNAL』第 4 巻、2016、213-224（査読有）
http://www.waseda.jp/flas/rilas/assets/uploads/2016/10/Rilas04_213-224_Emi-YAGISHITA.pdf

⑤Emi Yagishita.“Isadora Duncan’s Early Career in the United States.” Cambridge University Press (Congress on Research in Dance Conference Proceeding) Volume 2016, 2016, 436-442（査読有）
DOI: https://doi.org/10.1017/cor.2016.58

⑥柳下惠美「書評：井上理恵著『川上音二郎・貞奴―明治の演劇はじまる―』」『演劇映像』第 57 号、2016、29-31（査読無）

⑦柳下惠美「イザドラ・ダンカンの舞踊形成とその普及―彼女と継承者たちの国際的公演・教育活動を中心に―」『インターカルチュアル』第 14 号、2016、136-137（査読無）

⑧柳下惠美「イザドラ・ダンカンの初期舞踊形成・公演活動について―アメリカでの活動を中心に―」『WASED RILAS JOURNAL』

第 3 巻、75-85（査読有）
https://www.waseda.jp/flas/rilas/assets/uploads/2015/12/8d1a2249a0e82ac8aef9b4b6c214c98c.pdf

⑨柳下惠美「イザドラ・ダンカン(1877-1927)の舞踊芸術の構築と普及」『上智史学』第 60 巻、143-144（査読無）

〔学会発表〕（計 8 件）
①柳下惠美「自由な舞踊への回帰―ダンカン・ダンス」『生命と原点回帰（主催：山梨大学図書館)』2016 年 11 月 30 日、山梨大学（山梨県・甲府市）（招待講演）

②Emi Yagishita. “Isadora Duncan and the Japanese Performers: Sada Yacco, Hanako and Michio Ito.” SDHS/ CORD Joint Conference 2016, November 6, 2016, Pomona College (Claremont, USA)

③ Emi Yagishita. “Three Japanese Performers in the Early Twentieth Century: Sada Yacco, Hanako and Michio Ito.” October 26, 2015. University of Warsaw (Warsaw, Poland)(招待講演)

④ Emi Yagishita. “Sada Yacco and Hanako’s Performances: Images of Exotic Japan in the West.” October 22, 2015, Polish Institute of World Art Studies, Manggha Museum of Japanese Art and Thechnology (Krakow, Poland)

⑤柳下惠美「イザドラ・ダンカン(1877-1927)の舞踊芸術の確立―20 世紀初頭フランスにおける芸術家たちとの交流から―」『美学会全国大会第 66 回』2015 年 10 月 10 日、早稲田大学（東京都・新宿区）

⑥柳下惠美「イザドラ・ダンカンの舞踊学校とダンカン舞踊の継承」シンポジウム『わざ継承の歴史と現在―身体・記譜・共同体』2015 年 9 月 13 日、法政大学（東京都・千代田区）（招待講演）

⑦柳下惠美「イザドラ・ダンカン(1877-1927)の舞踊芸術の構築と普及」『上智史学会月例会』2015 年 6 月 20 日、上智大学（東京都・千代田区）

⑧柳下惠美「イザドラ・ダンカンの舞踊とその継承」『現代能楽における「型」継承の動態把握―比較演劇的視点から 第 8 回研究会』2015 年 6 月 16 日、法政大学能楽研究所会議室（東京都・千代田区）（招待講演）

６．研究組織
(1)研究代表者
柳下　惠美（YAGISHITA, Emi）
早稲田大学・文学学術院・助教
研究者番号：１０７５７２５６